

同志社大学
2010年度卒業論文

論題：ボランティア

－集団で行なう難しさと面白さ－

ボランティア

1. ボランティアの定義

2. ボランティアの歴史

3. ボランティアの種類

4. ボランティアの意義

5. ボランティアの課題

6. ボランティアの未来

7. ボランティアの発展

ボランティアの意義

社会学部社会学科

19071032

木村あさみ

担当教員：立木 茂雄

(22,525 文字)

要約

2007年12月、筆者は友人とともに、京都府京都市の同志社大学で音楽ボランティアサークル、PAZ MUSICA(パズムシカ)を立ち上げた。それから4年間、ただがむしやりに活動してきた。しかし、振り返ると常に安定した参加頻度を保っていたわけではなく、時期によって大きな差がみられた。定義することが極めて困難なボランティアをサークルとして運営していくにあたって必要なものとはなにか、参加頻度を一定に保つために必要なこととはなにか。今回はとくに、大学生が集団でボランティア活動を行うことに限定して考える。分析方法は、自らのサークルでの4年間の出来事のログをとり、コレスポネンズ分析を用いた。その結果、大学生が参加頻度を一定に保つことは極めて難しいのかもしれないが、“相手のことを思いやる気持ち”を持ち続け、コミュニケーションし続けることが必要であることや、率先して活動をするリーダーの存在が必要なことがわかった。個人的な問題を多く含むことにはなるが、同じように感じている人がいるはずである。この論文が、これから自らの後輩を含め、団体を運営していく人々に役立つことを願っている。

キーワード

ボランティア・自主性・集団行動・コミュニケーション・相互行為

目次

はじめに

1 ボランティア

- 1.1 ボランティアの定義
- 1.2 集団で行うボランティア
- 1.3 ボランティア活動が地域、社会にもたらす影響

2 集団行動

- 2.1 集団、社会とは
- 2.2 相互行為の乱れ
- 2.3 乱れへの対処法

3 民主主義における社会関係資本の重要性

- 3.1 民主的な政府
- 3.2 社会関係資本重要性

4 活動と分析方法

- 4.1 PAZ MUSICA について
- 4.2 分析方法

5 結果と考察

- 5.1 分析結果
- 5.2 考察

おわりに

参考文献

はじめに

2007年12月、筆者は友人とともに、京都府京都市の同志社大学で音楽ボランティアサークル、PAZ MUSICA(パズムシカ)を立ち上げた。それから4年間、ただがむしゃらに活動してきた。しかし、振り返ると常に安定して活動への参加頻度を保っていたわけではなく、時期によって大きな差がみられた。その要因とはなんだったのだろうか。また、定義することが極めて困難なボランティアをサークルとして運営していくにあたって必要なものはなにか、参加頻度を一定に保つために必要なことはなにか。今回はとくに、大学生が集団でボランティア活動を行うことに限定して考える。

第一章では、ボランティアについて、第二章では集団での相互行為について、第三章では民主主義についての先行研究について記述する。第四章では自らのサークル活動について、また、調査の方法や分析方法を述べ、第五章で分析結果と考察を述べる。おわりにとして結論、今後の課題について述べる。

この研究は筆者の個人的な問題を多く含むことにはなるが、同じように感じている人がいるはずである。この論文が、これから団体でボランティア活動をしていく人々の役に立つと考える

ボランティア

1.1 ボランティアの定義

ボランティアとはなんだろうか。定義することが極めて困難である。『ボランティア学を学ぶ人のために』の著者、内海成治は、ボランティア活動の基本条件を三つとし、それら全てが含まれている活動こそがボランティア活動であるとしている。その三つの条件とは、自発性、無償性、公益性である。順に三つの条件について説明する。(内海ほか 1999)

まず自発性とは、ボランティアとは決して人に強要されるものであってはならず、自らが進んで行うものである必要があるということである。では、人に勧められて始めた活動はボランティアではないのかという考えも出てくるが、人間の起こす行動はそれまでに出会った人や物などなにかしらの影響を受けているものであると考えられるため、決してそうとは言い切れない(内海ほか 1999)。

次に無償性である。賃金を頂くために活動する仕事とは異なり、金品を求めて行う活動ではないということである。しかし、実際にボランティア活動をしていると、お礼にと謝礼金を頂くことや、ジュース、お弁当を出して頂くことが頻繁にある。それらがあるからこそ、依頼者の方の気兼ねなく依頼することができるという一面もあるため、一概に、依頼主からなにか一つでも頂いたらボランティアではないとも言いがたい(内海ほか 1999)。

最後に公益性である。公益性とは、社会になにかしらの良い影響を及ぼすものである必要があるということである。決して“自らがしたいことをする”のではなく、社会の人々が求めていることはなにかを考えながら行うことが必要である。

また、内海氏は、基本条件に加えて、充たしていればより理想的だという理想条件もあげている。それが、創造性・先駆性・発見性・相互間などである。このように、ボランテ

ィアの条件を定めていても人それぞれの価値観によってそれらが満たされているかどうかは異なり、線引きすることは大変難しい（内海ほか 1999）。

次に、ボランティアにはどのようなとらえ方があるのか。内海氏は、チャリティーのボランティア（他人のための道徳的行為）、自己実現のボランティア（自分のための文化的行為）、社会参加のボランティア（社会のための公的な行為）という三つのとらえ方ができると考えている。他人のための行為と自分のための行為とは、一見正反対で異なるかのように感じられるが決してそうではなく、他人のためにする行為が自分のための行為と重なる活動こそがボランティアと言えるのである（内海ほか 1999）。

1.2 集団で行うボランティア

次に、ボランティア団体をつくる意味についてである。メリットとしては継続性・安定性の向上、数の力の発揮、バランス感覚の向上、メンバー間相互の支え合い、活動への入りやすさなどがあげられる。一人で行っている活動であれば、本人が辞めてしまえばそれで終わってしまうが、団体であれば他の者が補い継続させることができる。また、数が増えることによって、できる活動の幅が広がっていく。デメリットとしては、仲間割れのおこる可能性があるということである。ボランティア団体では、集団内での関係調整が非常に難しいことがゆえる。意欲のギャップやペースの違いにより仲間割れをおこしてしまいやすいからである。どうしてかということ、ボランティアとは個人のこだわりが強くでやすい。例えば、仕事であれば、皆の共通理念、第一の目標として“利益を得ること”、部活動などのスポーツであれば“勝つこと”などが掲げられている。ボランティア活動を行っている者にも、“誰かのためににかをしたい”という共通の思いはあるものの、そのための手段や目標などは個人差が大きい。しかし決して誰が正しくて、誰が間違っている決めることは極めて困難であるため、他の人のこだわりを受け入れながら活動を続けていかななくてはならないのである。その時に、思い入れの強い人ほど辛くなるという減少が起きてしまうのである（内海ほか 1999）。

では、どうすれば団体に上手く活動を続けていけるのだろうか。そのためには、好きだから活動するという姿勢を核に、多様な思いや意欲の違いを受け止めていく必要があると考える。参加頻度の少ないメンバーに対しても、どうして私だけが大変なことをしなくてはならないのだろうと考えるのではなく、この活動が好きだから進んで色々なことをしている。他の人はその人なりのペースで活動をしているのだと切り替えて考えることが大切である。また、信頼を築き、透明で公開した組織を創ることも必要な原則であるといえる。どうしても他の事柄で忙しいときに、あまり活動に参加できなくとも、それまでに信頼関係が築けていれば、受けてのとらえ方は大きく変わる。互いの人間性をよく知り、認め合うことが団体に活動を行っていく上でなによりも大切なことなのである（内海ほか 1999）。

1.3 ボランティア活動が地域、社会にもたらす影響

ボランティア活動が地域、社会にもたらす影響について、山谷敬三郎が研究している。近年急激な都市化が進み、その結果人々のつながりや近隣との交流が弱まり地域の人間関係が希薄なものになっている中で、地域社会に潤いをもたせ人々が互いのつながりを深めるためには、どのような組織やグループの力が必要であるのか。幌加内町の「音楽ボランティアの会」の活動をもとに調査したのである（山谷 1999）。

その結果、音楽ボランティアが地域の中で活動することによって、地域の様々な場面で地域全体のコミュニケーションが深まり、活性化してきていることが分かった。例えば比較的小さな組織であっても、それが果たす役割が大きく、行政主体だけではなく、自主的な集まりであるこのような小さな団体だからこそ活動がしやすいと考えられる。小さな実践であっても、そのコミュニティには非常に大きな良い影響を与えていることが分かった（山谷 1999）。

2 集団での相互行為

2.1 集団、社会とは

二人以上の人間が共に居合わせたとき、そこにはもう、一つの社会、集団ができあがる。社会とは、人間と人間のあらゆる関係を指し、集団とは複数の人間の空間的、目的的、心理的な集まりを指す。どちらにしても、それらにとって人間とは必要不可欠な存在であり、人間が集まることによって形成されている。そんな人間は誰も、個人的な価値観や自分自身を持っている。そんな自分自身のことを、アメリカの社会心理学者であるジョージ・ハーバート・ミードは“I”と表現した。彼いわく、Iとは生まれたそのときから現在に至るまで、様々な場面の中で築きあげられてきたものであり、この世の中に誰一人として全く同じIを持った人間は存在しない。60億人いれば、60億通りのIが存在するのである。そのIとは具体的にどういったものだろうか。Iとは、時にはその人の価値観であったり、その人の経験であったり、Iとは、容易に形に表せるものではない。よって、どれだけ仲がよくても、たとえ親兄弟、双子であったとしても、他の人間のIを全て理解することは不可能である。また、他の人間からはIが全て見えていることもない。そこでミードは、“me”という言葉を用いた。我々が普段見ている自分自身とは、自分の視点から自分を見る“I”の自分であり、他の人を通して見る自分、他の人あつての自分が“me”であるとしたのである。社会集団において、Iとmeはどのように関係してくるのか、また社会集団を成り立たすためにはどうすればよいのだろうか（Mead 1934=1973）。

2.2 相互行為の乱れ

まず、社会集団において、重要であるのは他の人に自分の意思を伝えることである。違った価値観、Iを持った人間が集まっているのだから、伝えられないことにはなにも始まらない。しかし、それは決してたやすいものではないことが先ほどの説明からも分かるだろう。いくらIを伝えようとするも、他の人はmeとして受け取ってしまうからである。どれだけ頑張っても、Iをそっくりそのまま他の人に伝えることはできないのである。

どんな人であっても自分からみる自分 I と、他の人から見られる自分 me の両方が存在していて、それは社会で他の人と関わる中で形成されていくものである。しかしその I や me の私は、普遍的なものではなく、その場の状況や年齢、一緒に過ごしている人など、その場その場で違うものでもある (Mead 1934=1973)。

では、より自分の I を他人に理解してもらうためにできることとはいったいなんだろうか。I を理解してもらうために、できることは、me をより I に近づけることである。そこで必要とされるのが相互作用であり、フィードバックなのである。相互作用とは二つ以上の存在が互いに影響を及ぼしあうことを指している。相互作用を行うことにより、me を I に近づけることができる。では具体的にどうすることが必要なのか (Mead 1934=1973)。

2.3 乱れへの対処法

では、どうすればこの流れを変えることができるのだろうか。そのためには、誰か一人だけが変わえようとするだけでは変わらなく、伝える側、そして受け取る側の双方が意識することが必要とされる。そして、個人が新しい行動を試みたときに、その行動に気づき、その行動に対する新しいフィードバックを提供することにより、その個人の試みが強化される。そうすることにより、me はじょじょに I に近づくことができると考えられる (Mead 1934=1973)。

具体的には、人に“問う”ことが重要となるのである。誰かが意見を出したときに、もし理解できにくければ、どうしてそう感じたのかを問い、相手がどういった考えをもっているかをより理解できるようにし、互いに理解を深め、違っていた価値観をより近付けていく作業が大切なのである。そうすることで、ばらばらだった考えが次第に近付いていく。それぞれが他人のことを考えずに、自分の考えだけで動いたとすれば、決して循環はなりたない。全員が、よく他人のことを見、考え、その上で最良だと思われる行動を考えて、行動を起こす。そうすることによって、少しずつみんなの理想が現実にと近付いていくのである (Mead 1934=1973)。

集団にいる全員が社会的想像力を働かせることが大切である。社会的想像力とは、個人的問題をたえず公共の問題に読み替え、公共の問題をそれがさまざまな人びとにとっていかなる人間的意味をもつのか、という形に翻訳することであったり、熟知している自らの型にはまった日常生活を新たな目で見直すために、当たり前のことから離れてものごとを考えることである。このような社会的想像力を社会、集団にいる全ての人々が働かすことが集団行動ではとても必要である。社会的想像力を働かせないことには、それぞれバラバラな方向性を持ってしまい、循環がうまく成り立たなくなる。それは、誰か一人でもかけたらそれは成り立たないのである (Mead 1934=1973)。

集団とは、二人という小集団であればまだやりやすく、その集団が大きくなればなるほど、難しいと感じてしまう。しかし、基本的なことは二人のグループであっても 60 億人のグループであったとしてもなんら変わりはない。一人一人が社会的想像力を働かせること、そのことについて考えていくことが、我々には必要とされている。また、社会相互関係について考えるときに忘れてはいけないことは、集中力を兼ね備えなければいけないこと、つまり、社会に対して関心を持ち、集中力ももって関わっていくこと、また集団という中で一つの共有した意見を持つようとする場合、グループ内の人全員がそのこと意識し、近づ